

トンコリ

OKI

トンコリは主に樺太、宗谷地方に伝わる弦楽器だ。どこから伝わってきたのかよくわかっていない。形はさておき音だけで聴くと西平ウメさんの「レタッチリ ハウ」は赤道直下の森に住むピグミーのリズムに似ている。クルパルマハさんの「ヘチリ」と呼ばれる曲は中央アジアの草原を馬で疾走しているように聞こえる。ウメさんの「ホスヤサイコス」の昭和37年のNHK収録バージョンはゴジラのテーマ曲の元ネタのようでもあり座敷で弾く芸者の奏でる音階とも似ていた。現存するトンコリの曲目は30曲前後だと思う。同じ曲でも異なった調弦で演奏をすることもありそれらのバージョンを加えれば曲数は増えるだろう。

トンコリ自体に人格があると考えられているので曲のことをトンコリの声という。曲は動物や人の動作を表現したものが多く。昔はトンコリは歌や踊りの伴奏としてもかなり自由に弾かれていたようだ。あってるんだか合っていないんだかわからないトンコリの演奏で頭を揺らせ、腰を振れと歌ったり踊ったりしている古い録音がある。ソ連の樺太占領を受けて樺太から北海道のオホーツク沿岸に引っ越してきた樺太アイヌの人たちの記録だ。トンコリの音程が怪しく揺れているのは古い録音テープの伸縮が原因と思い込んでいたが後日聴き返すと揺らぎはテープのせいではなくトンコリそのものの音だった。弦を弾くと駒が横滑りして音程に絶妙な揺らぎを与えていたのだ。この日たまたま条件が揃ってこの音になった。楽器としても完璧に作り込まない範囲を確保しておくのも大事なかなと思う。

昭和37年にNHKが収録したウメさんの一連のトンコリ演奏はどれも傑作だ。

この日はやる気満々でケント ハッカ トウセ やウチャオレ イレット、ヤイカテカラなど完璧な演奏が続く。やる気のない日の記録もちゃんと残っているので、体調や条件、録音者の進行でここまで変わるのかと驚いている。この日使っていたトンコリ

は高めのチューニングのせいか音に余韻があまりない。その分リズムが際立ってスリルのある演奏になった。ラウドで芯のある歪んだ音だ。調弦も面白いし、あまり感情を出さない進行役との会話や解説も楽しい。もしこの録音がなければ素晴らしい名曲の数々がこの地球から消えていただろう。

日本が戦争に負け樺太はソ連のものとなり、樺太のアイヌが北海道に移住しなければいけない時にウメさんは一本のトンコリを日本に持ってきたという。戦時下の混雑した船の中でトンコリはかさばったと思う。

ユジノサハリンスクからオホーツク沿岸を車で4、5時間行ったところにオタサンという小さな村がある。今ではフィロソフォというロシア風の地名になっている。日本時代は小田寒と呼ばれていた。黒船が日本にやってきた頃にこの村にはオノワンクというとてもうまい老人がいたという。しかもここはトンコリ名人ウメさんもクルバルマハさんもチカマハさんも生まれた由緒ある場所なのだ。ところがここには樺太アイヌのトンコリのメッカなどと書かれた石碑はなく、ここに住むロシア人もそんな昔のことは知らない。この村に来てワクワクするのはトンコリマニアだけだ。

黄砂がかすむおぼろ月夜の下、オタサンの浜でオノワンクはトンコリを弾いたという。流氷が接岸していると海と陸地の境界は消え、真冬の低い太陽がギラギラと輝く。雪で埋れたオタサンの森の中でトンコリを弾いてみたが音はたちどころに雪に吸い込まれていった。

トンコリの血みどろな側面も忘れてはならない。どこかに打ち捨てられたトンコリが人間の姿になって村々を訪ねてはクイズを出すという物語がある。真っ赤な靄の中から船に乗って現れた二人の男は家に上がり込んで俺の身元を言ってみろ、どういう親元なのか答えろと迫る。家の主人が答えられないとわかると殺し村を焼き

払った。二人組が遠近の村で暴れ回っている頃、オヤンルルコタンに住む半分人間で半分神様のヤイレスポの夢に守り神のチリキアンコフが現れ、二人組がもう直ぐやってくることを告げた。真っ赤な目をして現れた二人組は俺の身元を言ってみろ、どういう親元なのか答えろと迫った。そこでヤイレスポはチリキアンコフに言われたとおりに答えた。「お前らの正体はトンコリだべ!？」すると二人の男は突然姿を消し、そこには二台のトンコリが落ちていた。トンコリは粉々に打ち砕かれあたりの草むらにまかれたという。

魔物たちはこのトンコリの音が苦手だ。人間の腕から引っこ抜いた血管を弦にしてトンコリを弾き続けて魔物を退散させる話もある。近頃では自然を敬い愛するアイヌ民族の癒しの楽器トンコリなどと言われているが実際は夜も怖くて眠れない話ばかりが残っている。

トンコリは生き物の証として心臓と呼ばれる石が入っている。X線撮影で砕いた黒曜石の矢尻が入っているトンコリが見つかった。なぜ黒曜石かはわからない。国後島に行った時地元の漁師から黒曜石の矢尻をもらった。あんたの先祖のものだから返すと言っていた。

オタサンを訪ねたついでにポロナイスクの製材所に行って手に入れたエゾとドマツ材で作ったトンコリは完成が近づいてきている。国後の黒曜石はこの中に入るだろう。

バンドのメンバー居壁太のトンコリの弦の並びも奏法も彼自身のオリジナルだ。「アイヌ音楽にリハはない。あるのは本番だけ」をモットーに活動してきたが、一年かけたりハビリの効果もむなしく、2023年の8月にあの世に旅立ってしまった。ホールのポスターはまだ元気だった頃の居壁が写っている。このホール公演を復活の励みにしてきただけに残念でならない。公演では居壁のレパートリーも演奏するつもりだ。